

令和3年10月29日

南の風 421

南部地区ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

420号の引用の続きです。

そういったクラブは総じてジムの装備に力を入れているようです。

スペインのクラブはさまざまな特色を持ちますが、近年は前者のほうが多いようです。私たちはコンディショニングにも取り組むけれど、フットボーラーを育てるときにコグニティブ系の話や、そこを磨くトレーニングにより多くの時間を割きます。体が大きくなくても、スピードがなくても、高く跳でなくても、世界一になれるスポーツだと選手に話します。

そう考えると、スペイン人同様、体格に劣る日本が指向すべきスタイルは「ビジャレアル的なもの」だといえるでしょう。

速さ、高さ、強さは、高いレベルになればなるほど、努力だけでは越えられない部分があるからです。であれば、日本人のディスアドバンテージである速さ、高さ、強さを磨かなくても、脳内思考のスピード、質の高さ、しなやかさを身に付ければいい。

これはまさに、2010年のワールドカップ（W杯）南アフリカ大会で世界一になったスペイン代表が証明しています。日本同様、スペインも小柄な人が多く、フィジカルは強くありません。つまり、ビジャレアルメソッドは日本人に向いているのです。

日本も認知力を高める育成スタイルを選択したほうがよいのではないかと思います。そもそも脳内作業のスピードを上げる取り組みは、勤勉で真面目な日本人の得意分野のはずです。

フットボールは、日本人が世界の上位に食い込んでいくるスポーツのひとつになりうるのです。

「頑張る文化」から「創造する文化」へ

とはいって、日本で育成の段階で認知力の養成を指向する指導者は、まだ少数というほかありません。つまり、日本が指向すべきフットボーラースタイルと、それを強化する「指導文化」は、大きくずれているようです。「日本（のスポーツ界）には、一生懸命頑張る文化はあるけれど、選手が自ら考えて行動する文化がなさすぎる」

第2章で紹介した、大学でバスケットボールを指導している守屋さんの言葉です。彼女のいう文化は、つまるところ指導、教育を指します。

頑張らせる指導（教育）はあるけれど、自ら考えて創造したり、自分で判断できる力を養う指導（教育）がないということです。

～ 中略 ～

「認知力」は、禁止事項があまりなく、自由で、たくさんの選択肢から選ぶ機会が多い環境の中で養えます。ところが、日本の環境はそうではありません。判断を養う教育が施されていません。

次号に続きます。